

## 西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷

松本秀士

提要：“神经”在西洋解剖学的发展历史上是最重要的概念之一。它从人体所有的筋结构中发现出来的一套系统。关于“神经”，曾在拙稿上讨论过。本稿主要分析中国传统医学所说的“筋”与其相关解剖学名词，以及在西医东渐时期翻译出来的历史性解剖学术语的变迁，来探讨西洋解剖学术语翻译的合理性。

### はじめに.

独自に発展の歴史を歩んできた東西文明の中でも、とくに身体論をめぐる相違は顕著である。今日、中国伝統医学と西洋医学とを融合させようとするいわゆる「中西医结合」の試みもみられるが、東西両医学各々の根底を支えるそれぞれの身体論にある特性を明らかにしない限り、それが真の意味で実を結ぶこともないであろう。

そこには、西洋医学の最も根底を支える解剖学で用いられる語彙が、中国独自の身体論を反映した漢字を用いた訳語で表現されているという問題がある。つまり、中国独自の身体論が明らかにされないままに、この身体論を根源にもった漢字を、西洋の解剖学用語に対する訳語として使用してきているという問題である。すなわち、両医学の本質的相違が言語的側面によってさらに不明確なものとなっているのである。

そうした問題を抱えた西洋解剖学用語に対する訳語の一つとして、松本(2008a)において「神経」を論じた<sup>1)</sup>。その過程で「筋」、あるいは「筋」をめぐる語等にもそうした問題が存在することが浮き彫りとなっていたが、このことを十分に検討することはなかった。本稿ではこのことを焦点に、中国伝統医学のいう「筋」、「筋」をめぐる語、ならびにそれらをめぐる訳語の変遷を検討しながら、東西文明各々に展開してきた独自の身体論の一端を明らかにしたい。

### 1. 中国伝統医学における「筋」

中国伝統医学は『素問』『靈樞』の両書（両書をまとめて『黄帝内経』、あるいは『内経』と

も呼称する) を経典として今日に至るまで展開してきていることから、はじめに両書における「筋」に関する記述を検討したい<sup>2</sup>。なお、現代日本語において **muscle** は「筋」、または「筋肉」であり、解剖学用語としては「筋」を用いる。一方、現代中国語において **muscle** は「肌」、または「肌肉」であり、解剖学用語としては「肌」を用いる。このことから、両書における「肌」に関する記述も併せて検討したい。

『素問』平人氣象論篇第十八には「肝藏**筋膜**之氣也…脾藏**肌肉**之氣也」、同書宣明五氣篇第二十三には「五藏所主。心主脉。肺主皮。肝主**筋**。脾主**肉**。腎主骨。是謂五主」、同書痿論篇第四十四には「肺主身之皮毛。心主身之血脉。肝主身之**筋膜**。脾主身之**肌肉**。腎主身之骨髓」、同書五運行大論篇第六十七には「肝生**筋**。筋生心…心生血。血生脾…脾生**肉**。肉生肺…肺生皮毛。皮毛生腎…腎生骨髓。髓生肝」等とあるように、「筋」あるいは「筋膜」は「肝」に、「肉」あるいは「肌肉」は「脾」に属するものと捉えられている。あるいは、『素問』宣明五氣篇第二十三に「五藏所主。心主脉。肺主皮。肝主**筋**。脾主**肉**。腎主骨。是謂五主」、同書痿論篇第四十四に「肺主身之皮毛。心主身之血脉。肝主身之**筋膜**。脾主身之**肌肉**。腎主身之骨髓」、『靈樞』九鍼論第七十八に「五主。心主脉。肺主皮。肝主**筋**。脾主**肌**。腎主骨」等とあるように、「筋」あるいは「筋膜」の主宰は「肝」、「肉」「肌」「肌肉」の主宰は「脾」であると捉えられている。なお、それらの記述にみる「肉」「肌」「肌肉」の三者は、いずれも同義に論じられており、以下この前提で論じる。

『靈樞』経脉第十に「足厥陰氣絶。則**筋**絶。厥陰者。肝脉也。肝者。筋之合也」とあるように、「肝」は「経脉」でいうと「足厥陰肝経」に属し、このため「筋」は「肝脉」によって栄養されると捉えられている<sup>3</sup>。「脾」は「経脉」でいうと「足太陰脾経」に属し、同書同篇に「足太陰氣絶者。則脉不榮**肌肉**」とあるように、「脾」を主宰とする「肌肉」が「脾脉」によって栄養されると捉えられている。松本(2008b)で論じたように、中国伝統医学における「五藏」は単に今日いう肺臓・心臓・肝臓・脾臓・腎臓の五つの臓器を指すものではなく、全身をめぐる「経脉」を基本とする、いわば生理的単位を指すものである<sup>4</sup>。そして、そうした生理的単位の属性上に「筋」「肌」も捉えられていることは明確である。

また、『靈樞』経脉第十に「人始生。先成精。精成而腦髓生。**骨爲幹**。脉爲營。**筋爲剛**。**肉爲墻**」とあるように、中国伝統医学独自の発生学的な視点においても「筋」はより身体構造の根幹に近く、「肌」(「肉」)はそれよりも表層部に位置すると捉えられている。

以上のように、中国伝統医学の経典『内経』で論じられる「筋」と「肌」は、その属性が根本的に異なるものであることがわかる。特に『靈樞』経脉第十の「**筋爲剛**」の記述での「剛」は「綱」に通じ<sup>5</sup>、「綱」は『詩』大雅に「綱紀四方」とある<sup>6</sup>ことから等も、「**筋爲剛**」の記述

は一般に「筋」の形態的特徴・身体構造上の役割を表していると解釈される。このことを踏まえれば、「筋」は西洋解剖学のいう *muscle* というよりも、*muscle* の形を維持し、これを骨に固定する *tendon*、あるいは *muscle* 等の組織を貫きながら全身を張りめぐる *nerve* 等を含む広い概念のものと考えられよう。あるいは、「骨爲幹」の記述を合わせれば、「筋爲剛」の記述は自ずと身体構造の根幹を担う骨と骨とを繋ぐ役割を含むものであり、これは *ligament* 等を包括するものと考えられよう。また、「肉爲膚」の記述からは、「肌」（「肉」）が「骨」「脈」「筋」の三者よりも外層からこれらを囲いながら保護する形態であることが読み取れ<sup>7</sup>、西洋解剖学のいう *muscle* により近い概念であることがわかる（なお、今日の日本における解剖学用語では *muscle* は「筋」、*tendon* は「腱」、*ligament* は「靭帯」、*nerve* は「神経」であり、中国におけるそれらは、*muscle* が「肌」、*ligament* が「[韋刃]帯」であることを除いて同様である）。

## 2. 近代日本における「筋」

次に日本における西洋解剖学の本格的受容で最も起点的役割を果たし、後への影響の大きかったことで知られる杉田玄白（1733～1817）らによる『解体新書』（1774）、および宇田川玄真（1769～1835）による『医範提綱』（1805）をみたい。

『解体新書』格致篇においては身体の基本要素の一つとして「筋」があげられている<sup>8</sup>。『解体新書』の原書は周知の通り、クルムス（Johann Adam Kulmus 1689～1745）による *Anatomische Tabellen* 第二版（1732）のディクテン（Gerardus Dicten 1696?～1770）訳オランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen*（1734）で、そこに記されるラテン語原語は *Musculus*、オランダ語は *enn Spier* である<sup>9</sup>。つまり、『解体新書』において *muscle* に対する訳語は「筋」と定められたのである。『医範提綱』もこの訳語を受け継いでいる<sup>10</sup>。両書は中国伝統医学にみる身体論に対する疑問から、視覚的に詳細に人体の細部を論じる西洋の解剖学書を翻訳するに至ったのであるが、すでに松本（2008a）で指摘してきたように、その核心では『内経』医学の影響がみられる<sup>11</sup>。このことを踏まえた上で『解体新書』肝膽篇をみると「膽者與肝連」とあるように、胆が肝と一連の構造物であることを明記した上で「特膽裏者…筋様」と記されており、胆が「筋様」（ラテン語原語；*Tunica musculosa*、オランダ語原語；*de Spieragtige*）を被るもの、すなわち、胆嚢を構成する *muscular layer* 等の構造を「筋様」と訳出させるに至ったこと背景には、『内経』にみる「筋」が「肝」に属するという記述があったと考えられる。なお、『解体新書』脾篇には *muscle* 等の構造物との繋がりには記されておらず、このことから『内経』の論じる「脾」と「肌」との関連性は参照されず、*muscle* に対して「肌」の訳語が与えられるに至らなかったものと考えられる。従って、これらのことが『解体新書』において *muscle* に対して「筋」を訳語と定めるに

至った要因であると考えられ、『医範提綱』もそれを受け継いだのである。

tendon に対する訳語は『解体新書』においては「筋根」、『医範提綱』においては「腱」である。『説文解字』において「腱」は「筋之本也」とあり<sup>12</sup>、『廣韻』において「腱」は「筋也。一曰筋頭」とある<sup>13</sup>。『医範提綱』には『解体新書』での訳語「筋根」を改正した旨が明記されており、従って「筋根」を端的に表現する漢字として「腱」を採用したことが伺える<sup>14</sup>。tendon が muscle の端で bone に付着する部分であることから、こうした訳語が与えられたことに一定の合理性をみる。

ligament に対する訳語は『解体新書』においては原語のオランダ語 *Banden* を音訳した「蛮度（バンド）」であり（併記されるラテン語原語は *ligamenta*）、『医範提綱』においては「靱帯」である。「靱帯」は『医範提綱』で改正した訳語であることが示されている。「靱」の本字は「[韋刃]」で、『説文解字』によると「[韋刃]」は「柔而固也」とある。同書で「帯」は「男子鞶帶。婦人帶絲。象繫佩之形。佩必有巾」とあるように、佩を繫いで吊しとめる革製の帯を指している。つまり、「靱」あるいは「帯」の漢字に身体の各部位を直接に表現する意味合いはなく、専らオランダ語のバンドを音訳から意識に変えたものと考えられる。

また、近代日本において最も初期に専門的に医学語彙を集めたものとして、奥山虎章による『医語類聚』（1872）と<sup>15</sup>、さらに解剖学・生理学語彙に特化させた『解剖生理学語部』（1881）<sup>16</sup>が重要な位置にある。muscle に対する訳語は前者が「筋」、後者が「筋肉」である。以下、両書ともに tendon に対する訳語は「腱」、ligament に対する訳語は「靱帯」、nerve に対する訳語は「神経」である。『医語類聚』でのこれら基本的訳語は『医範提綱』と同様であることがわかる。

### 3-1. 近代中国における「筋」－『人身説概』から『医学英華字訳』まで

中国における近代的な西洋医学、特に解剖学的知識の流入は断片的なものではあるが、明末に渡ってきたイエズス会士による宣教活動の一環として起こった。ドイツ人宣教師テレンツ（Johann Terrentius 1576～1630 中国名；鄧玉函）による『人身説概』（1623）は、現存する中で最も体系的に西洋解剖学を伝えた書である<sup>17</sup>。

『人身説概』において muscle には「肉塊」、tendon には「肉骨筋」、ligament には「肯筋」、nerve には「細筋」の訳語が与えられているが、後三者は文脈の中でしばしば「筋」と省略して呼ばれる。muscle および tendon を含む muscle system、あるいは bone と bone とを繋ぐ ligament から、身体の中枢から全身を張りめぐらす nervous system としての nerve を明確に区別していったことは、西洋解剖学の流れにおいて特に重要である。すなわち、nerve の中でも特に末梢に位置するものは muscle の中に埋没する筋状のものであり、これが中枢と連動しながら伝導・伝達を担う

特別な構造物であるという認識を明確化させていったことが、西洋解剖学の歴史の中で重要な意義をもつのである。『人身説概』における訳語は、暗にそうした背景を反映したかたちとなっていることがわかる。

なお、tendon は muscle の端に位置する組織で bone との連結を担うものであるから、tendon に対する「肉骨筋」の訳語は一定の合理性をみる。ligament に対する訳語「肯筋」を構成する「肯」は古くは「肩」であるから<sup>18</sup>、『説文解字』で「肩」をみると「骨間肉肩。肩着也」とあるように、骨と骨との間に付着する「肉」を指すものとしているが、続けて「一曰骨無肉也」とあることから、少なくともそれが muscle, tendon 等のいわゆる「肉」とは異なるという認識の存在を伺わせる。ligament は単に bone と bone とを繋ぐもので、これは収縮・弛緩運動が可能な muscle、すなわち「肉塊」とは異なるものであるから、「肯」に「筋」を付すことで ligament を合理的に表現しようとした意図が伺える。

清代に入ってから、中国伝統医学を主体としながらも西洋解剖学の一部の内容を取り入れた医学書が編纂されている。王宏翰（生没年不詳）による『医学原始』（1688）がそれである。同書には、西洋解剖学のいう nerve に関する内容が盛り込まれており、nerve を指す語として「細筋」が用いられている<sup>19</sup>。しかし、西洋解剖学のいう muscle, tendon, および ligament に関する記述はみられず、それまでの中国伝統の医学書と同様にして『素問』『靈枢』の論じる「筋」「肌」を引用するのみである。

いわゆる典礼論争により 1773 年にはイエズス会は解散に追い込まれ、これによって中国におけるイエズス会士による宣教活動は途絶えてしまう。後の 1807 年にはロンドン伝道会（London Missionary Society）の宣教師モリソン（Robert Morrison 1782～1834 中国名；馬礼遜）が中国入りを果たし、新たな宣教活動を開始する。そしてその一環として、一連の『華英字典』（1819～1823）を編纂していったことは周知の通りである。

以下に『華英字典』にある muscle, tendon, nerve 等とこれらに関連する見出し語を抜き出して列記した<sup>20</sup>。なお、muscle の見出し語はなく、これに相当する見出し語として flesh をあげた。また、[韋刃]の見出し語では現代中国語にある ligament としての意味はないが、参考のためにこれもあげた。

Flesh the muscle of the bod. 肉

Tendon 筋

nerve 筋

（※ ligament の見出し語はない）

肌 an animal or human body including flesh and bones.

筋 the strong tendous parts of the muscle; the tendons; strong and nervous; having strong fibres.

the name of a medicine. 筋力 muscular strength. 筋骨 muscles or tendons and bones.

腱 origin or head of the muscles; the end of the tendons. the cracking of the tendons.

[韋刃] flexible and strong; soft but not easily rent. (※ ligament を表すものではない)

以上のように、『華英字典』で「肉」は muscle<sup>21</sup>、「腱」は tendon、「筋」は tendon あるいは nerve に相当すると捉えられていることがわかる。なお、熟語「筋骨」は単純に tendon と bones だけではなく、これらに付随する muscle も含むものと捉えられている。「肌」については、bone とこれに付随する muscle を含むもので、muscle のみを指す語とは捉えられていない。従って、『華英字典』に収録される身体各部位を表す語彙の中でも、少なくとも「筋」「肌」に関するものは、中国伝統医学の経典『内経』を参照してはいないことがわかる。

一般に、近代中国においてはじめて本格的に西洋解剖学を伝える役割を果たしたとされるのが、英国人医療宣教師ホブソン (Benjamin Hobson 1816~1873 中国名; 合信) 編纂による『全体新論』(1851) である<sup>22</sup>。同書は西洋の解剖学書・解剖生理学書から多数の解剖図を引用しており、視覚的側面から当時の中国人に西洋医学の一端を伝えようとした意図がみられる。同書に掲載される解剖図において、muscle 関係の語彙をみると、「手肉」「足肉」「身肉」「手筋帯」「肉」が書き記されている。つまり、解剖図においては、muscle に対して「肉」、ligament に対して「筋帯」を訳語として用いている。

同書本文をみると身体略論の篇に「人身肥網膜下。有**動肉**[自注; 或曰**肌**即字典所謂附骨之肉]」とある。一般に、muscle は皮下脂肪組織の下にあるのだから、ここでは muscle の訳語として「動肉」が用いられていることがわかる(なお、『字典』では「肌」であることを自注している。前出のモリソンによる『華英字典』の「肌」では特徴的に bones に言及していることから、『字典』とはそれを指している可能性がある)。一方、同書には muscle の概要をまとめた肌肉功用論の篇があり、篇名にある「肌肉」は muscle に対する訳語であることがわかる。そこに記される内容をみると「夫**肉者**。所以運用其骨者也。各骨必有**筋帯**相連」とある。特に四肢にある muscle の主要な役割は bone を動かすことにありに、ligament の主要な役割は bone と bone を繋ぐことにあるのだから、muscle に対して「肉」、ligament に対して「筋帯」を訳語として用いていることがわかる。さらに同書同篇に「每**肉**皆有頭尾。頭尾之間生**肉筋**[自注; 其筋堅[韋刃]光白。不類腦氣筋]」とある。四肢の主要な muscle の両端では muscle の繊維が束となって bone に付着する役割を担う強靱な tendon を形成しているのだから、tendon に対して「肉筋」を訳語として用い

ていることがわかる。

ホブソンは『全体新論』刊行の後に『博物新編』（1855）、『西医略論』（1857）、『婦嬰新説』（1858）、『内科新説』（1858）を次々と編纂していき、それらで用いた医学関係の語彙を『医学英華字積』（1858）として総括しており、解剖学語彙についてはこれを明確に分けて記載している。『医学英華字積』で muscle 関係の語彙は「The muscles. 各処肌肉」としてまとめられており、見出し語数は 29 である<sup>23</sup>。これらとは別に「Articulations. 全体交節」の中の語彙として ligament に関する見出し語が 1 つある。そのほとんどは特定の各部位にある muscle 等を示すものではなく、従って muscle の各部位に対して訳語を定めてはおらず、たとえば「muscle of the head and neck 頭頸肌肉」のように、おおよその部位分類を示したものである。tendon と ligament の各部の訳語についても同様に一切示されていない。

またホブソンは単独の muscle に対して直接に「肌肉」を訳語として示してはおらず、先の「頭頸肌肉」の例でみるように語構成から muscle に対して「肌肉」が訳語として用いられていることを間接的に探るしかない。このようにして『医学英華字積』にある muscle 関係の語彙に対する訳語を以下に抽出するとともに、その根拠を、見出し語 1 つを括弧内に示しながら列記する。なお、同書で nerve に対する訳語も同様にして抽出すれば、「脳気筋」あるいは「筋」である。

muscle 肌肉（muscle of the abdomen 肚腹肌肉）

tendon 肉筋（tendon 肉筋）

ligament 交節筋（flat and round ligament 交節扁筋圓筋）

### 3-2. 近代中国における「筋」ーポスト・ホブソンから民国初期まで

muscle system, ligament, および nervous system それぞれの各部位について、詳細な内容を中国にはじめて伝える役割を果たすのは、米国人医療宣教師オスグッド（Dauphin William Osgood 1845～1880 中国名；柯為良）らの編訳した『全体闡微』（1881）の刊行を待つこととなる。刊行の動機は、1877 年に上海において開かれた宣教師の会合で、いまだ中国に本格的な解剖学がもたらされていないことが議題にあがり、本格的な人体解剖学のテキストの編纂がオスグッドの手に一任されたことによる<sup>24</sup>。一方、当時の西洋ではイギリスの解剖学の権威であるグレイ（Henry Gray, 1825?～1861）が人体解剖学の専門書『解剖学 記述と外科』（初版 1858）を刊行して久しく、イギリスにとどまらず、アメリカにおいても第七～八版まで版を重ねられていた。『全体闡微』は当時、中国で入手可能な最新の版をもとにして編訳されたものである<sup>25</sup>。

『全体闡微』では muscle に対して「肌」、tendon に対して「肌筋」、ligament に対して「骨筋」、そして nerve に対しては「脳筋」の訳語が与えられている。ただし、tendon と ligament の各部の

訳語については、同じ「-筋」を語尾にして組み立てられている。

英国人医療宣教師ダッジョン (John Dudgeon 1837~1901 中国名 ; 徳貞) による『全体通考』(1886) も、先の 그레이 の『解剖学 記述と外科』をもとに編訳されているが、その当時の最新の版ではなく初版から第四版までのいずれかに基づくものである<sup>26</sup>。『全体通考』においては、*muscle* に対して「肌」、*tendon* に対して「肌筋」、*ligament* に対して「筋帯」、そして *nerve* に対しては「脳筋」の訳語が与えられており、*tendon* と *ligament* の各部の訳語についてはそれぞれ順に、「-筋」「-筋帯」を語尾にして組み立てられている<sup>27</sup>。

清末の中国において幅広く読まれた漢訳解剖生理学書として、米国人医療宣教師ポーター (Henry Porter 1845~1916 中国名 ; 博恒理) の編訳した『省身指掌』があり、これには 1891 年版、1897 年版、および 1908 年版が現存本として確認される<sup>28</sup>。それぞれの内容には多少の異同がみられ、特に *nerve* の訳語についてはそれぞれの版の順に「脳線」「脳線」「系」である。しかし、*muscle*, *tendon*, *ligament* の訳語は一定しており、それぞれ順に「肌」(または「肌肉」)、「肌筋」「骨筋」である。

一方、当時の西洋においては 1887 年にドイツ解剖学協会が委員会を設立することで、解剖学用語統一に向けての活動が本格化していった。そして、1894 年にバーセルの解剖学協会において B. N. A. (Basel Nomina Anatomica) として、はじめての国際解剖学用語が承認されるに至っている<sup>29</sup>。清末の中国における医療宣教師の活動は、1886 年に創立された博医会 (China medical missionary association) により、さらに組織だったものとなっていった。B. N. A. が定められたことを受けて、博医会においても解剖学用語の中国語訳統一に向けての活動は顕著となり、その一環として英国人医療宣教師コースランド (Philip Brunelleschi Cousland 1861~1930 中国名 ; 高似蘭) が編纂した『医学辞彙』(1908) がある<sup>30</sup>。同書は日本における訳語も参照していることが特徴であるが、西洋解剖学の主旨、医療宣教師創出による歴代の中国語訳、ならびに中国伝統の身体論を反映した漢字の意味等を斟酌しながら中国語訳を定めている。

同書において *muscle*, *tendon*, *ligament*, *nerve* に対する訳語は、それぞれ順に「肌」、「肌腱」、「筋帯」、「系」である。『医学辞彙』第三版(1918) では異同はないが、『医学辞彙』増訂第三版 (1920) では *nerve* だけが「脳経」に改められている<sup>31</sup>。『医学辞彙』第五版訂正重印 (1926) では *ligament* の訳語が「靱帯」に改められた他、*nerve* の訳語についても「神経」に改められている。ただし、*nerve* の訳語については、それまでの「脳経」も併記している<sup>32</sup>。『医学辞彙』第六版 (1930) も第五版訂正重印と同様である<sup>33</sup>。

清末には、前出の医療宣教師による解剖学用語の流れの他に、和製漢語による解剖学用語の流入も起きている。それをもたらした漢訳解剖学書の筆頭にあげられるのが日本への留学経験



のある丁福保（1874～1952）による『新靈枢』（1908）である<sup>34</sup>。中国伝統医学の経典にちなんだ書名であるが、内容はあくまで西洋解剖学を伝えるものである。同書において **muscle** に対する訳語は「筋肉」、**tendon** に対する訳語は「腱」、**ligament** に対する訳語は「靭帯」、そして **nerve** に対する訳語は「神経」である。これらの訳語は先の奥山虎章による『解剖生理学語部』にあるそれらと完全に一致するものであり、前出の医療宣教師による訳語を全く取り入れていないことがわかる。日本留学経験者による解剖学書としては次に湯爾和（1878～1940）の編訳した『解剖学提綱』（1924）があげられるが、**muscle** に対する訳語のみは「肌肉」あるいは「肌」に改めている<sup>35</sup>。

最後に『解剖学提綱』前後に刊行された主要な漢訳解剖学書の語彙をあげておきたい。前出のイギリスの解剖学の権威であるグレイが編纂した人体解剖学の専門書『解剖学 記述と外科』は、今日に至るまでその意志を継ぐ研究者によって版が重ねられており、中国においても民国期以降もその訳本は刊行され続けていった。その筆頭にあるのは中国博医会による『格氏系統解剖学』（1923）であり<sup>36</sup>、後の1932年にはその第二版が刊行されている<sup>37</sup>。両書の訳語は **muscle** 「肌」、**tendon** 「肌腱」、**ligament** 「靭帯」であり、**nerve** については前書が「脳経」、後書が「神経」と異同がみられる。

参考のために新中国成立以後のグレイを原書とする漢訳解剖学書をあげると、人民軍医社出版の『格氏系統解剖学』（1951）があるが、人民軍医社と先の中国博医会との直接の繋がりはない。同書での訳語は **muscle** 「肌」、**tendon** 「肌腱」、**ligament** 「靭帯」、**nerve** 「神経」である<sup>38</sup>。

#### 4. 結び

今日の解剖学用語をみると日本における **muscle** は「筋」、中国におけるそれは「肌」であるが、本稿で検討したように中国伝統医学の経典『内経』をみる限り、「肌」をその訳語とすることの方がより合理的であり、西洋解剖学を中国に伝播した欧米からの宣教師による中国語訳をみても、それはごく自然の判断であることがわかる。

一方、和製漢語の「神経」は『内経』医学的思想に基づくものであるから、西洋の解剖学的視点からは不適當であり、このことはすでに松本（2008c）等で指摘した通りである<sup>39</sup>。この語が **nerve** を『内経』医学的解釈に基づいてつくられたものであったからこそ、漢字文化圏にとってはじめてである **nerve** の概念が、あたかも漢字文化と同化したものとなり、**nerve** に本来備わる西洋解剖学的意義からではなく漢字のもつ表層的意義から、日本を越えて中国の人々に広く受容されるに至ったのである。しかし、日本においてつくられた **muscle** を「筋」とする訳語は、明らかに本来の「筋」の意義に反するものであったからこそ、中国への伝播の過程で排除され

たのである。

最後に、広く skin に対して「肌」の呼称があることから医学用語としての skin の訳語に触れたい。skin に対する「肌」の呼称は一般の文学作品、たとえば杜牧 (803-852) 『阿房宮賦』 (825) に「一肌一容、盡態極妍」と出てくる表現等にさかのぼり<sup>40</sup>、既述のように少なくとも中国伝統医学の流れや、本稿で検討した宣教師による西洋解剖学伝播の流れでは、「肌」は skin とは異なる部位、muscle を指すものである。そして、次に論じるように中国医学の流れにおいては、広く skin に相当する語としては、「肌」ではなく「皮」あるいは「皮膚」が用いられている。

先に中国伝統医学の経典『内経』をみると、『素問』陰陽應象大論篇第五に「西方生燥。燥生金。金生辛。辛生肺。肺生**皮毛**」とあるように、「毛」とともに「肺」に属するものと捉えられている。同書六節藏象論篇第九に「肺者。氣之本。魄之處也。其華在毛。其充在**皮**」とあるように、人の生命現象を担う「氣」の根本的に司るのが「肺」であり、この「氣」を直接的に満たす部位として「皮」は捉えられている。また、同書鍼解篇第五十四に「一鍼**皮**。二鍼**肉**。三鍼**脉**。四鍼**筋**。五鍼**骨**」とある記述では、「皮」、「肌」（「肉」）、「脈」、「筋」、「骨」の順にこれらの身体各部が、身体表層から次第に身体深層に位置することを端的に示している。あるいは先の陰陽應象大論篇第五に「善治者治**皮毛**。其次治**肌膚**。其次治**筋脉**。其次治**六府**。其次治**五藏**」とある記述もほぼ同様の主旨で、身体の最も深層部に位置するものとして「五藏六府」をあげている。これでは「皮」よりもより身体深層部に位置するものとして「肌膚」があげられている。あるいは、同書至眞要大論篇第七十四に「寒熱**皮膚**痛」とあるように、「皮膚」の熟語もみられる。「膚」についてみると同書五常政大論篇第七十に「脾其畏風。其主口…其應**長夏**…其色**黃**。其養**肉**。其病否。其味**甘**。其音**宮**。其物**膚**」とある「脾」に関する記述では、「肌」（「肉」）だけでなく「膚」も「脾」に属することがあげられている(これは五行説に基づくもので「脾」は大きくは「土」に属し、同様に「土」の象に属するものとして「長夏」「黄」「甘」「宮」等があげられている)。従って、『内経』における「皮膚」は「皮」の直下に存在するという「膚」との位置関係による熟語であるが、「皮」の属性は「肺」、「膚」の属性は「肌」と同様にして「脾」であると捉えられており、両者に『内経』医学独特の区分が存在する。その位置関係から西洋解剖学的視点でみるならば、「皮」は epidermal (今日いう表皮) 等、「膚」は dermis (今日いう真皮) 等、「皮膚」はそれらを包括する広義的な skin であると解釈されよう。

米国人宣教師ウィリアムス (Samuel Wells Williams 1812~1884 中国名; 衛三畏) 編纂の『英華韻府歷階』(1844) で skin の見出し語には「皮」、muscle の見出し語には「肉筋、肌膚」とあり、muscle の訳語として「肌膚」をあげたことは、『内経』における「肌膚」の属性が「脾」にあることと符合するものとなっている (なお、『英華韻府歷階』で tendon の見出し語には「筋」、

nerve の見出し語にも「筋」とあるが、ligament の見出し語はない)<sup>41</sup>。

一方、『医範提綱』では dermis に対して「皮」の訳語を与えており、それらを包括する広義の skin に対する訳語は「肌」「肌膚」あるいは「皮膚」である（他に epidermal に対して「表皮」を訳語としている）。

最後に、本稿で焦点とした『内経』の語彙、および各訳語を以下の表にまとめた。

表

	muscle	tendon	ligament	nerve	skin
現代日本語	筋	腱	靭帯	神経	皮膚
現代中国語	肌	腱	[韋刃]帯	神经	皮膚
『内経』	肌・肉・肌肉	筋	筋	(筋)	皮・皮膚
『解体新書』(1774)	筋	筋根	蛮度(バンド)	神经	皮
『医範提綱』(1805)	筋	腱	靭帯	神经	肌・肌膚・皮膚
『医語類聚』(1872)	筋	腱	靭帯	神经	皮
『解剖生理学語部』(1881)	筋肉	腱	靭帯	神经	皮・皮膚
『人身説概』(1623)	肉塊	肉骨筋	肯筋	細筋	皮
『華英字典』(1819-1823)	筋	筋	—	筋	皮
『華英韻府歴階』(1844)	肉筋・肌膚	筋	—	筋	皮
『全体新論』(1851)	動肉・肌肉・肉	肉筋	筋帯	腦気筋・腦筋・気筋・筋	皮膚
『医学英華字釈』(1858)	肌肉	肉筋	交節筋	腦気筋・腦筋・筋	皮
『全体闡微』(1881)	肌	肌筋	骨筋	腦筋	皮膚
『全体通考』(1886)	肌	肌筋	筋帯	腦筋	皮・皮膚
『省身指掌』(1891版)	肌・肌肉	肌筋	骨筋	腦線	皮膚
『省身指掌』(1897版)	肌・肌肉	肌筋	骨筋	腦線	皮膚
『省身指掌』(1908版)	肌・肌肉	肌筋	骨筋	系	皮
『医学辞彙』初版(1908)	肌	肌腱・腱	筋帯	系・腦線	皮
『医学辞彙』三版(1918)	肌	肌腱・腱	筋帯	系・腦線	皮・皮膚
『医学辞彙』増訂三版(1920)				腦経	
『医学辞彙』五版重印(1926)	肌	腱	靭帯	神経・腦経	皮・皮膚
『医学辞彙』六版(1930)	肌	腱	靭帯	神経・腦経	皮・皮膚
『新内経』(1908)	筋肉	腱	靭帯	神経	皮膚
『解剖学提綱』(1924)	肌肉・肌	腱	靭帯	神経	皮
『格氏系統解剖学』(1923)	肌	肌腱	靭帯	腦経	皮
『格氏系統解剖学』(1932)	肌	腱	靭帯	神経	皮
『格氏系統解剖学』(1951)	肌	肌腱	靭帯	神経	皮

## 【注】

- 1 松本秀士「神経の概念の初期的流入に関する日中比較研究」『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成—創出と共有—』関西大学出版部. 2008a. pp. 373-394.
- 2 本稿で『素問』は、『重廣補註黄帝内経素問』（『四部叢刊』明翻北宋本影印）上海商務印書館. 1935 参照。『靈樞』は、『靈樞経』（『四部叢刊』明趙府居敬堂刊本影印）上海商務印書館. 1935 参照。
- 3 『靈樞』経筋第十三によると、そのように「十二経脈」に栄養される一連の「筋」は「経筋」として論じられており、「経筋」は十二ある。
- 4 松本秀士「身体が語るところ」『境界を越えて』立教比較文明学会 2008b. pp. 41-42 参照。

- 5 楊上善『黄帝内経太素』経脈之一では『靈枢』の経文「筋爲剛」を「筋爲綱」としており(ただし「綱」はその本字[糸+岡+正])、「網維四支. 約百體」と自注している。本稿で『黄帝内経太素』は、鄭孝昌 李克光主編『黄帝内経太素校注[上]』人民衛生出版社. 2005 参照。
- 6 毛亨傳 鄭玄箋 孔穎達疏『毛詩正義』(四部備要.中華書局據阮刻本校刊)臺灣中華書局 1965 参照。
- 7 前掲『黄帝内経太素』経脈之一での『靈枢』の経文「肉爲膚」に対する自注は「其肉成已. 盛裏筋骨」で、「肌」(「肉」)が「筋骨」を厚くつつむ形態であることが、より明確に述べられている。
- 8 本稿で『解体新書』は、杉田玄白[他]訳. 『解体新書』須原屋市兵衛. 1774 参照。
- 9 本稿で *Ontleedkundige Tafelen* (1734)は、小川鼎三監訳、酒井恒編訳『ターヘル・アナトミアと解体新書』名古屋大学出版会. 1986 参照。
- 10 本稿で『医範提綱』は、宇田川玄真『医範提綱』風雲堂. 1805 参照。
- 11 前掲松本(2008a). pp. 373-379 参照。
- 12 本稿で『説文解字』は、許慎撰『説文解字』(清同治陳昌治本影印)中華書店. 1963 参照。
- 13 『廣韻』(四部叢刊初編縮本)台灣商務印書館.1965 参照。
- 14 『解体新書』では自注として「筋根」が中国でいわれる「大筋」であり、「筋の端」であることが言及されており、『医範提綱』で「筋根」の訳語を「腱」へと改めさせるきっかけとなったとみられる。なお、『康熙字典』の「腱」には、本文中であげた『説文解字』『廣韻』の記述だけでなく、『集韻』にある「一曰筋之大者」の記述も掲載されている。本稿で『康熙字典』は、『康熙字典』上海書店. 1985 (康熙五十五年御製本影印) 参照。
- 15 本稿で『医語類聚』は、奥山虎章『医語類聚』1872(『明治期専門術語集』有精堂影印. 1985)参照。
- 16 本稿で『解剖生理学語部』は、奥山虎章『解剖生理学語部』名山閣. 1881 参照。
- 17 本稿で『人身説概』は、鄧玉函『人身説概』(中国中医研究院図書館蔵抄本) 参照。他にイタリア人宣教師ロー(Giacomo Rho 1593~1638 中国名; 羅雅谷)による『人身図説』(成書年不詳)があり、不鮮明ながらも解剖図を掲載するが、西洋解剖学の体系上、不完全であるために本稿では検討しない。
- 18 『康熙字典』で「肯」をみると「〔古文〕冎…『字林』著骨肉也」とあることによる。なお、『人身説概』においても目次では「冎」の字体となっている。
- 19 本稿で『医学原始』は、王宏翰『医学原始』(1692 刊本影印) 上海科学技術出版社. 1989.参照。
- 20 本稿で『華英字典』は、R Morrison A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE IN THREE PARTS. 1819~1823 (『華英辞書集成』影印). ゆまに書房. 1996 参照。
- 21 なお、「肉」の見出し語には「the flesh of animals, soft, fat」とあるように、muscle 意外にも贅肉あるいは脂肪等の概念が含まれると捉えられていることがわかる。
- 22 本稿で『全体新論』は、合信『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版. 1851 参照。
- 23 本稿で『医学英華字釈』は、B Hobson A MEDICAL VOCABULARY IN ENGLISH AND CHINESE. SHANGHAE MISSION PRESS: 1858 参照。
- 24 『全体闡微』英文序参照。本稿で『全体闡微』は、柯為良『全体闡微』保福山聖教医館. 1881 参照。
- 25 松本秀士「清末刊行の中国文 人体解剖学書について」『日本医史学雑誌』53 卷 4 号. 日本医史学会. 2007. pp. 553-554 参照。
- 26 前掲松本(2007). pp. 554 参照。
- 27 本稿で『全体通考』は、徳貞『全体通考』同文館. 1886 参照。
- 28 本稿で『省身指掌』は、博恒理『省身指掌』京都燈市口美華書院. 1891、博恒理『省身指掌』京都燈市口美華書院. 1897、および博恒理『省身指掌』上海美華書院. 1908 の各版を参照。

- 29 坂井建雄『人体観の歴史』岩波書店. 2008. pp. 304-305 参照。
- 30 高似蘭『医学辞彙』（初版）博医会. 1908 参照。
- 31 高似蘭『医学辞彙』（第三版）博医会. 1918, 高似蘭『医学辞彙』（増訂三版）博医会. 1920（合本）参照。  
なお、増訂三版は第三版に対する増訂分のみが記されたものである。
- 32 高似蘭・魯德馨『医学辞彙』（第五版訂正重印）中国博医会. 1926 参照。
- 33 高似蘭・魯德馨『医学辞彙』（第六版）中国博医会. 1930 参照。
- 34 丁福保『新内経』（第三版）上海文明書局. 1911 参照。
- 35 湯爾和『解剖学提綱』商務印書館. 1924 参照。
- 36 中国博医会『格氏系統解剖学』（初版）上海美華書館. 1923 参照。
- 37 L M Ingle『格氏系統解剖学』（再版）中国博医会. 1932 参照。
- 38 韓焯然 王二中編訳『格氏系統解剖学』人民軍医社西南分社. 1951 参照。
- 39 松本秀士「中国における西洋解剖学の受容について——解剖学用語の変遷から」『或問』15号. 近代東西言語文化接触研究会. 2008c. pp. 30-32 参照。
- 40 杜牧『樊川文集』（四部叢刊初編縮本）台灣商務印書館. 1965 参照。
- 41 S W Williams, An English and Chinese vocabulary, the Office of the Chinese Repository, 1844 参照。

## 近代東西言語文化接触研究会

本会は、16世紀以降の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を趣旨とし、具体的には次のような課題が含まれる。

- I. 西洋文明の伝来とそれに伴う言語接触の諸問題に関する研究
- II. 西洋の概念の東洋化と漢字文化圏における新語彙の交流と普及に関する研究
- III. 近代学術用語の成立・普及、およびその過程に関する研究
- IV. 欧米人の中国語学研究（語法、語彙、音韻、文体、官話、方言研究等々）に関する考察
- V. 宣教師による文化教育事業の諸問題（例えば教育事業、出版事業、医療事業など）に関する研究
- VI. 漢訳聖書等の翻訳に関する研究
- VII. その他の文化交流の諸問題（例えば、布教と近代文明の啓蒙、近代印刷術の導入とその影響など）に関する研究

本会は、当面以下のような活動を行う。

1. 年3回程度の研究会
2. 年2回の会誌『或問』の発行
3. 語彙索引や影印等の資料集（『或問叢書』）の発行
4. インターネットを通じての各種コーパス（資料庫）及び語彙検索サービスの提供
5. (4)のための各種資料のデータベースの制作
6. 内外研究者との積極的な学術交流

### 会員

本会の研究会に出席し、会誌『或問』を購読する人を会員と認める。

本会は、言語学、歴史学、科学史等諸分野の研究者の力を結集させ、学際的なアプローチを目指している。また研究会、会誌の発行によって若手の研究者に活躍の場を提供する。学問分野の垣根を越えての多くの参集を期待している。本会は当面、事務局を下記に置き、諸事項に関する問い合わせも下記にて行う。

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 関西大学文学部中国語中国文学科  
内田慶市研究室 (Tel.ダイヤルイン 06-6368-0431)

E-mail: keiuchid@pp.ij4u.or.jp

URL: <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shkky/>

UPL: <http://we.fl.kansai-u.ac.jp/>

代表世話人：内田慶市